

四川の旅(4) 李庄古鎮から五粮液工場、そして竹海へ 寺西 俊英

2017年10月22日の朝が来た。四川に来てから4日目である。今日は宜賓市にある「李庄古鎮」と「五粮液工場」に行くことになっている。今日も天気がすっきりせず時折小雨が降るのでホテルで傘を借りた。また押金を200元払った。傘を返せばお金は戻してくれるが、お客を信用していないのだ。傘には「凱爾頓豪庭酒店」とホテルの名前が入っているのに、こんなものを誰が盗むか!と言いたくなる。

李庄古鎮は宜賓市中心部から東に19キロメートルの所にある。2005年に国家級歴史文化名鎮に指定され、2008年に国家AAAA級旅游景区に指定されており、肩書は立派である。また「万里長江第一古鎮」の称号まで頂いている。何でも「第一」や「最大」の好きなお国柄だけある。

さてタクシーで古鎮の入口に着いた。傘を差しながら幅の広いダラダラ坂を下っていくと正面に長江が見えてくる。前号に書いたように宜賓市中心部から

長江は始まるので、この場所は起点から19キロメートル下流にある。長江を見るのは、2008年に社員旅行で見た江蘇省の鎮江が最初だが、岷江と違ってここもゆったり流れている。右手に川に沿って道が続いているが、街を紹介する説明板が立っておりそれを見ると古鎮の歴史が書かれている。説明板には1470年の歴史がある、と書かれている。さらに読み続けると、「梁代大同6年(公元540年)に南廣県と六同郡を設置した」とある。梁と言う国は、南北朝時代の南朝側の国で、502年から557年と短命の国で、その後は「陳」に代わっている。そして589年に「隋」に全国統一されている。いずれにしてもこの辺りは6世紀には歴史に残っているわけである。日本は第29代欽明天皇の御代である。蘇我氏と物部氏が対立していたころだ。

近代に到って第二次世界大戦時には、抗日拠点となり上海で有名な「同済大学」、南京の「金陵大学」また中央博物院など多くの施設が戦火を避けてこの地に移っている。当時の李庄は多くの学生で活気に溢れていたのであろう。川沿いの道を進むとすぐに同済大学が入っていた建物があり、その旨が書かれている。

そぞろ歩いていると、強烈な匂いが襲ってくる。

何かと思えば白酒を作っている。この建物は昔ながらの製法で製造しているらしく、いくつもの竹で編んだ丸い籠に高粱や小麦が入れている。何を蒸しているのか分からないがあちこち蒸気が出ていた。ここで白酒のお土産をいくつか購入した。友人に教えてもらったが、李庄は昔から「三白」で有名なのだそうだ。その一つが「白酒」なのだ。午後は「五粮液」の大工場に見学に行くが、このような市井の家内工業的な製造所もあちこちにあるのである



「酒聖山」から臨む五粮液大工場。遠くに名物のボトルが見える。

う。あと二つは、「白肉」と「白糕」である。「白肉」とは、茹でてある豚肉を大きな長方形の包丁で薄切りにしたものである。これを唐辛子のタレにつけて食べる。厚さは2ミリくらいであるがうまく切れるようになるには2～3年の修業が必要だそうだ。午前11時をまわっていたので白肉料理を食べに行くことにした。友人は事前に調べていたようで、「映秋飯店」というお店に案内してくれた。肉の好きな私だが白肉は本当にさっぱりして美味しかった。ここを出てすこし歩くと玉仏寺(天上宮)があり中に入ってみた。なかなか立派な寺である。ちなみに李庄一帯は古い街だけあって、奎星閣、禹王宮、南華宮などこの地方では名の通った寺院がいくつもある。

次の予定があるので、先程の店で聞いたバスセンターの方向に歩く。すると「白糕」のお店の前に来た。



「竹海」の入場門。周囲はすべて竹林。

試食させてくれるので食べてみたが如何にも中国風なお菓子である。美味しそうなのでお土産も含めてたくさん購入した。ここでバスセンターの場所を聞くとまだかなりあると言う。時間を無駄にしたくないのでタクシーで「五粮液」工場に向かった。15分くらい乗ったであろうか、目的地に到着した。タクシーを下車して奥の方に歩いて行く。倉庫なのか工場なのか分からないが大きな建物がいくつも連なっている。工場の中に入って見てみたかったが丁度工事をしている養生の壁が続くのでそのそばを通り過ぎるだけである。もっとも中に入れたとしても先ほどの鼻を刺す匂いが充満していると思われるので、どうしても見たいわけではない。そのうちに金属製のライオンと銀色に光る女神(?)の像の所に来た。どちらもなかなかの像である。像の両側から階段が小山の上に伸びている。傍らにある看板には、この山を「酒聖山」というと書かれている。そして説明板には次のように書かれていた。「酒聖山、是十里酒城制高点。海拔320米、山上有一觀景台及造型彫塑」つまり酒聖山は、〈海拔320メートルでこのあたりで最高地点である。山の上には展望台とモニュメントがある〉のである。「制高点」は辞書では、軍事上重要な高地や建築物とも出ているがここでは単なる最高地点としておこう。階段を数十段上ると目指す頂上とは反対側の遠くに、市の観光案内のパンフレットにある有名な巨大な白酒のボトルのモニュメントが見えて来る。このボトルを見ると、ようやく宜宾市まで来たんだなと何だか嬉しくなる。さらに上るとボトルは少し小さくなって逆に工場の宏大な全景が望まれる。頂上には子供が喜びそうなモニュメントがいくつか置かれてあり、少し

離れたところに白亜の大きなもう一つの女神像が天を衝くように立っていた。

すこし霧がかかっていたが周囲に高い山がないため海拔320メートルからの見晴らしは素晴らしくしばらく眺めていた。降りるときは白酒のボトルを見ながら一歩一歩かみしめる様を下山した。日本では、お酒の製造工場では試飲する建物があるがここでは残念ながら見当たらなかった。

工場の入口に着き、15時近くになったのでタクシーでまずホテルに向かい傘を返し荷物を受け取ってから、「竹海」に向かうことにした。ホテルで押金200元を返してもらってホテルに別れを告げた。友人が運転手と話をし竹海まで150元で交渉が成立した。途中高速道路に乗ったりしてようやく竹海の入場券を売る旅行センター前に着いた。入場券を買いに行こうとすると、友人とタクシー運転手が話しているが何か折り合いがつかない様子である。聞くと高速に乗ったりしたので200元欲しいと言うことである。私が中に入って「150元で約束したのだからそれ以上は払わない」と強く言うとあきらめて走り去って行った。

入場券売り場に行って、友人に私のも買うように頼むとしばらくして戻り3人で220元だった、と言う。3で割り切れないので理由を聞くと、70歳以上は無料だとのこと。つまり入場券は一人110元(日本円で約1700円)である。儲かった気分であるが70歳以上無料の観光地は初めてである。ホテルからの迎えの車が来るまで周囲の景色に見入っていた。見渡す限り竹、竹、竹である。ここからいくつかの小山が見渡せるがすべて竹で覆われて今まで見たことのない光景である。あとで運転手からの話で「この辺りは、パンダはいない」ことが分かったが、やはり四川省はパンダの郷だと実感した。マイクロバスは竹林を縫うように走り、夕方6時頃「思楠・竹園酒店」ホテルに無事着いた。まだ行ったことは無いが富士山の樹海のようなイメージで、今居る場所はどのあたりか全く分からない。ホテルは山小屋風の造りで周囲に溶け込んだ佇まいである。山の中腹ということもあり流石に寒さが厳しく、各部屋は暖房で暖かくしていた。

(続く)